

第 23 回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2021 年 3 月 18 日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

14:00 から 16:00 までの予定で、文部科学省省議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。120 人前後が視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. ウィズコロナ・ポストコロナ時代の大学入学者選抜

今回も前回に引き続き WEB 会議方式で行われ、文科省の会議室からは三島座長と川嶋委員が、その他の委員はネットを経由して参加した。事務局からは岡委員が欠席のため山口理事が代理出席であること、また芝井委員が途中退席の予定であることが告げられた。萩生田大臣は冒頭から 10 分ほど参加していた。

まず、議題 1 について資料 1 に基づいて川嶋委員より説明があった。第 21 回会議の議論を踏まえて、その内容が以下の 5 つの項目建てでまとめられている。

- (1) 令和 6 年度実施の入学者選抜に向けて
- (2) 秋季入学等の入学時期・修学年限の多様化に対応した入学者選抜のあり方
- (3) 総合型・学校推薦型選抜の推進
- (4) 大学入学者選抜におけるデジタル化の推進
- (5) 大学入学者選抜の実施・検討体制

資料 1 の 5 つの項目ごとに意見交換が行われた。委員の意見の概要は以下の通りである。

(1) について

末富委員： 第 1 回共通テストの評価について、その現状と今後のスケジュールはどうなっているか。

→ (山本委員) 集まってディスカッションできないので、例年よりは遅れている。評価結果は集まりつつあるので、それをまとめれば次回は報告できるのではないかと思う。

末富委員： 必ず、第 1 回共通テストの振り返りを待って提言を出すべき。

芝井委員： 学習の遅れを考慮して第 2 日程を設定したが、そちらを選択した学生は少数であった。主たる目的としては失敗だったのではないか。

両角委員： 第 1 回の振り返りは重要。渡部委員の出してくれた意見は良かったので、島田委員や清水委員の意見も聞きたい。また、(1)に書かれたことは必ずしも令和 6 年度に全部やらなくてもよいのではないか。

柴田委員： 調査書を見ると、高 3 の出席日数が例年は 240 日程度だったが、今年は 180 日

程度になっており、その影響が気になる。また、医学系において生物が入試に課されていないと書かれているが、入学後の学習基盤として高校における物理・化学が必要であるためだ。

萩原委員：東京圏では休校により今年度の出席すべき日数が60日程度減っている。授業を急ぎ、演習を減らしたりして入試に間に合わせた。細かくは入学後の様子を見てもらいたい。次の学年も全体として学習が遅れているが、3年次に巻き返すだろう。

末富委員：今年度、第2日程を設定したことはリスクマネジメントの観点から意義は小さくない。ありがたかったと思う。

清水委員：令和6年度のことだけではなく、令和4、5年度の第2日程をどうするかなどについても入れてはどうか。また、第1回共通テストの振り返りについても、機会があれば意見を述べたいと思う。

(2)、(3)について

山口氏：秋季入学について、一般選抜とは異なる基準・方法でという点には賛同する。当面は限定的な実施であり、共通テストを活用するかどうかについては個別大学に任せればよい。「実施要項に盛り込む」という記述は強すぎる。

両角委員：社会人や留学生など多様な人材をとるために秋季入学を検討するのであって、この書き方は順序が逆だと思う。共通テストの活用などは、まだ今議論する段階ではない。また、(3)で専門人材の育成については、まず学部主導の入試であることを変えていかななくてはならない。

→(三島座長)秋入学については、今後の教育再生実行会議などで議論されていく。今回は、現状のデータを見てもらうことと入試の多様化という観点で出したもの。

芝井委員：秋季入学の件は、両角委員の意見に賛同する。(3)の総合型・学校推薦型の良さが発揮される分野というのは、高校での成果が入学後の学習に直接つながる分野かどうかに関連している。

柴田委員：秋季入学の事例では、選抜期日が春と重なっており、そのギャップタームの活用が気になる。仮面浪人が多くなるのではという懸念がある。また、専門人材の育成については重要であるが、日本の入試風土から教員以外が手を出しにくい状況である。志願者に接する人が合否判定に関わると情が移るなどの問題も生じる。コンプライアンスを身につけるなど、入試に携わっている人の能力を上げていく必要がある。

小林委員：秋季入学は以前に議題に挙がったが、日本の制度を大幅に変えなくてはならないのでなくなった話ではないか。秋季入学者は卒業も秋になることを想定しているのか。また、医学系の一般選抜の割合について実態と異なるように感じるが、附属高校などは推薦の数値に入っているのか。医学系では地域枠などを設定しているが、学力が足りずに入れられないことがあり、理想に現状がついていない状況である。

→(三島座長)秋季入学については、多様な人材をとるために入試のやり方を多様化す

ることを考えている。卒業時期も多様になると考えられる。

島田委員： アドミッションセンターの専任者も増えてきたが、学部の壁が厚いのが悩みであり、学部主導の入試から脱却することが必要。総合型選抜については、理学や歴史など高校での学びを直接引き受けられる分野は相性がよい。経営や心理学など、直接見にくい分野は難しい。高大連携でそのような分野を理解してもらうことが必要だが、指導教員が選抜にあたらないう意識的に分けている。医学・歯学など国家資格をとる必要がある領域は基礎学力が必要であり、学力の担保が必要となる。

渡部委員： それぞれの大学で追跡調査を行い、入試の妥当性を検証することが重要だ。

末富委員： 成績の段階標示は実際に活用されたのか。定員管理が厳格な中で技術的にフィットしないと思う。

→（三島座長）現時点で、今年度のデータはまだない。

柴田委員： 段階標示についてはデータを入手したばかりで、その活用方法を検討していきたい。また、学校推薦型選抜に共通テストの成績を入れると不自由になる「10日前ルール」という要項上の制約がある。一般入試の日程を後ろにずらさなければならず、改善を検討してもらいたい。

(4)について

芝井委員： 「各大学への出願前に志願者に得点を通知する仕組み」とあるが、私大は出願が早くこれは国公立を前提とした表記になっているので、改めてほしい。

萩原委員： デジタル環境の問題については、大学だけではなく高等学校も同様であり配慮してもらいたい。

斎木委員： 出願の電子化については支持する。初期投資が必要であり、国として手当てすべき。

穴戸委員： オンライン面接では、音声言語で対応できない学生への対応として、手話通訳など配慮を検討してほしい。

→（事務局）オンライン面接の実態を調査して把握したい。

牧田委員： 面接する側のスキルにもよるが、直接会わないとわからないこともたくさんあり、オンライン面接は万能ではない。直接面接できる方法も仕組みとして入れるべき。

小林委員： 電子出願率は高くなっているものの、現状では紙ベースでの書類送付もまだ多く残っている。医学部は面接で人間性を見るがオンラインではやはり難しい。文科省の実態調査では、オンライン面接をやろうと思ってもできなかったケースも調べてほしい。

渡部委員： オンライン面接では公平性が問題となる。自宅ならリラックスできるし、何かを見ながら答えることもできる。一方、対面の場合は、慣れない大学という場所で緊張してしまう。注意深く設計することが重要となる。

柴田委員： 現在、郵送でやり取りしている調査書も、電子化の検討が進められている。その点についても盛り込んでほしい。

(5)について

萩原委員：入試情報の公表はぜひ進めてほしい。高校側としてはとてもありがたい。

吉田委員：デジタル環境は今年度大きく変わった。令和6年度にはもっと進化していると思う。共通テストの実施時期は1月でいいのか。英語4技能の資格試験を利用することで時期を分散させることになる。

山口氏：入試センターの経営改善は重要であり、国として考えてもらいたい。協議体の常設については賛同するが、今年度の個別試験の中止があったことは苦渋の決断であった。

小林委員：全体として国公立を前提とした書き方になっている。少子化が進む中で私大も頑張っており、「選抜」というより「マッチング」になってきている。「マッチング」についても考えてもらいたい。

全体を通して

末富委員：入試センターの財政問題には憂慮している。国からの交付金がなくなったのは本当によかったのか。柔軟に対応すべき。

斎木委員：入試センターの役割の重要性から、国が支援をするべき。

両角委員：中長期的に少子化の傾向にあり、大学の状況もそれぞれ異なる。考え方を実態に合わせて変えていかなければならない。それぞれの大学が考えればよいことで、一般論として議論しなくてもよい内容もある。

柴田委員：入試センターの財政については、事業仕分けの時に受益者負担という考えで変更になったという経緯がある。社会全体の公共的役割になってきているので、公的資金でやってほしい。

清水委員：共通テストはセーフティネットの意味合いが強くなったものの、リスク管理の観点からはすべて頼るのもよくない。機能をスリム化していくことも必要であるし、CBTなど研究面での財政支援も強く訴えていくべき。

渡部委員：CBTとIRTは別の考え方であり、注意深く文言を検討してもらいたい。

次回の第24回会議の予定については、日程調整後に決まり次第連絡することとなった。予定より10分ほど早く会議は終了となった。